

Title	部分冠詞と不可算名詞の教授法：フランス語の「数えられない」とは何か
Sub Title	Les articles partitifs et les noms dits indéénombrables : réflexion sur ce qui ne peut pas se compter en français
Author	黒木, 朋興(Kuroki, Tomooki)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2021
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.73 (2021. 10) ,p.1- 19
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20211031-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

部分冠詞と不可算名詞の教授法

——フランス語の「数えられない」とは何か——

黒 木 朋 興

序

日本語にない冠詞は日本人のフランス語学習者の頭を大いに悩ませる文法事項の1つだが、この論文ではその中でも特に不可算名詞につくとされる部分冠詞をとりあげ、この「不可算」という表現が何を意味するかについての説明を試みる。その際、単にフランス語の冠詞について説明するだけでなく、英語とフランス語の冠詞の比較を通して理解を深めてみたい。最終的には、不可算とは、単に数えられるかどうかの問題ではなく単位の問題であることを明らかにする。

総称の問題

既に英語を学んでいる日本人のフランス語学習者の中には、英語の無冠詞という用法の所為で、フランス語の冠詞の理解が難しいと感じてしまう人が多いのではないだろうか。英語の場合、無冠詞は総称の意味で使われる例と不特定多数を指す例があり、見かけの上で区別がつかない。対してフランス語ではそれぞれに冠詞がつく。ここで総称ということがどういうことなのかを理解していなければ冠詞の使い分けは困難となるが、英語に慣れている学習者にとってはこの違いが不明瞭なのだ。

下記の例文を見てもらいたい。

There are apples.	Il y a des pommes.	りんごがある。
I like apples.	J'aime les pommes.	私はりんごが好き。
There is wine.	Il y a du vin.	ワインがある
I like wine.	J'aime le vin.	私はワインが好き。

英語では複数の名詞や不可算名詞には冠詞を付けないケースが多いのに対し、フランス語ではそれぞれ複数の不定冠詞、複数の定冠詞、部分冠詞と単数の定冠詞が付く。ここでは「私はりんごが好き」と「私はワインが好き」という日本語訳がついている欧文のそれぞれが総称にあたる。

それでは総称とは何であろうか？ 総称とはフランス語で言えば“terme générique”であり、物や概念を一般化して述べる用法（généralisation）である。日本人学習者の場合、この「一般化」という言い方に惑わされるケースが多いように思われる。小学館の『精選版日本国語大辞典』（2006）によると「一般化」とは「ある事例から、導きだした法則や概念などを、広く普遍的に通用することとみなすこと」とある。対して、欧米語における総称とは「すべての」といった意味になるのだ¹⁾。

以下、具体的に英語とフランス語の比較から総称と冠詞の問題について考えてみたい。英語では複数の名詞や不可算名詞が無冠詞になることについて考えてみよう。上記の例で言えば、

I like apples.

I like wine.

といった文の場合、apples が複数、wine が不可算名詞である。フランス語では、

J'aime les pommes.

1) Cf., 一川周史著、『初学者も専門家も新・冠詞抜きでフランス語はわからない—例文比較による徹底解説』、駿河台出版社、2007、pp. 12–3。

J'aime le vin.

となり、それぞれ複数と単数の定冠詞がつく。

また、以下の英語も複数の名詞や不可算名詞なので無冠詞になる。

There are apples.

There is wine.

ところが、これを仏訳するとそれぞれ不定冠詞と不可算名詞につくとされる部分冠詞になるのである。

Il y a des pommes.

Il y a du vin.

つまり、この4つの文の場合、英語では複数と不可算の名詞はすべて無冠詞となるのに対し、フランス語では「好き」であることを表明する総称の用法の場合は定冠詞の複数と単数になって、「～がある」ことを示す文の場合は不定冠詞と部分冠詞になる。

このケースでは、定冠詞は「特定のあの」という意味ではない場合、総称の用法と考えて良い。日本人学習者は「一般的」という日本語に惑わされ易いが、欧米の総称とは基本的には「この世にあるすべてのりんご／ワインが好き」という意味で、その場合「どのりんご／ワインでも美味しくいただく」ことになり、故に「一般的に言って、りんご／ワインが好き」という意味になる、という論理があることを確認したい。日本語の「一般的」という表現ではぼやけてしまうが、欧米語の論理はその根底に「この世にあるすべての」という意味があるのだ。また、これらの定冠詞が複数と単数なのは、総称の可算名詞につく定冠詞は複数、不可算名詞につくのが単数という区分である。

対して、「～がある」という文に関してフランス語では、特定のものがあ

る場合は定冠詞をつけるが、不特定のものがある場合は不定冠詞と部分冠詞がつく。上述のように、総称の定冠詞の les あるいは le が「この世にあるすべての」という意味であることを考えれば、特定の意味以外の場合、

Il y a les pommes.

Il y a le vin.

という文には無理がある。何故なら、眼前に「この世にあるすべてのりんご／ワインが（今ここに）ある」ということは現実にはあり得ないからである。となれば、今ここにあるりんご／ワインは、この世にあるすべてのりんご／ワインの中の一部分に過ぎないことになる。

ここで重要なのは、全体と部分の対比である。「特定のあの」という文脈がない状況では、定冠詞はその名詞全体を指すのに対し、不定冠詞と部分冠詞はその名詞の部分指すことになるのだ。

注意すべき点は、日本人学習者の中には不可算名詞を、抽象的な概念を指す名詞だと勘違いする者が少なくないことである。既に述べた通り、定冠詞の「すべての」名詞に対して、不定冠詞や部分冠詞が付く名詞の場合、具体的な人やものが生活空間にあることを含意している。つまり不可算名詞がついている名詞は数えられないというだけで、決して抽象的な概念を指しているわけではない。具体的な存在を指しているのである。対して、総称の定冠詞がついている名詞の場合、その名詞のすべてを指している以上、目の前にない存在も含んでおり、抽象度は不定冠詞や部分冠詞がついている名詞より高いことになる。

ところが、英語には無冠詞で抽象的な概念を指す用法があるので、日本人学習者の中には部分冠詞がついている名詞が抽象的な概念を指すものと捉えてしまうものがある。つまり、英語には不可算名詞が無冠詞になる、別のパターンがあるのだ。例えば、以下の英文を見てみたい。

Language is the life of the people who use it. (言語はそれを使用してい

る人々の命である。)

Language に冠詞がついていないのは何故なのだろうか？ 英文法の世界では、これらの名詞は不可算であると同時に、抽象度が高いので冠詞が落ちていと解している。例えば、石田秀雄は上の文に関して、以下のように言う。

Language が不可算名詞の形で用いられているのは、それがヒトという種のみが持っているコミュニケーションの手段としての「言語（一般）」を意味しているからです。これは「言語というもの」と言い換えてもよいでしょうが、そうした「言語（一般）」あるいは「言語というもの」は様々な規則から成っている体系であり、相当に抽象性が高いことから非有界的な存在として認識されています。通例、抽象度が高いということは、その形状がとらえにくいことを示唆するため、非有界的な存在として認識された上で、不可算名詞として処理されます²⁾。

英語では抽象的な概念を扱う場合は冠詞が落ちるということだ。抽象概念が不可算とみなされているとも言える。例えば、石田は上記の記述に引き続き次の例文を示して以下のように言っている。

Iron rusts easily. (鉄は錆びやすい)

[...] Iron は、元素記号 Fe で表される物質すなわち『金属としての鉄』を意味しているため、非有界的な存在として認識され、不可算名詞の形で使用されています³⁾。

この鉄は物質の名称であり、不可算名詞と見做されているので冠詞が落ちていくというわけだ。つまり、抽象概念も物質の名称も英語では、「非有界的

2) 石田秀雄著、『わかりやすい英語冠詞講義』大修館書店、2002、p. 33。

3) *Ibid.*, pp. 36-7.

な存在」であるが故に不可算と見做され冠詞をつけないという法則が確認できる。

次に、上記の2つの英文をフランス語に訳してみよう。

Le langage est la vie des gens qui l'emploient.

Le fer rouille facilement.

「言語 langage」と「鉄 fer」には定冠詞単数の「le」がついているのが確認できる。これらの定冠詞「le」は「特定のあの」という意味ではなく、「ワインが好き」の例文で見た総称の用法、つまり「この世にあるすべての」といった意味が基となり「一般的な意味」になる名詞につく定冠詞である。単数なのは「言語 langage」と「鉄 fer」が不可算だからに他ならない。

日本人学習者に対しては、これらの「言語 langage」と「鉄 fer」という名詞が不可算だからと言ってこれらに部分冠詞「du」がつくことはないということを強調しなければならない。フランス語では不可算名詞の場合、抽象的な概念を指して一般的な意味における何かを指す際は定冠詞単数の「le/la」がつくのに対し、具体的な物質を対象にする際は部分冠詞「du/de la」がつくのである。つまり、不可算＝抽象的という式はフランス語では必ずしも成り立たない。

英語において不可算名詞は冠詞が落ちるので、抽象的な概念を扱ったり一般的な意味で使ったりする場合にも、具体的な物質を扱う場合も、冠詞に違いは現れない。ところがフランス語では定冠詞と部分冠詞を使い分ける。よって、英語の無冠詞の用例との比較のもと、この使い分けをきちんと説明する必要がある。

不可算とは何か

不可算名詞とは何であろうか？ 私たちは中学校の英語の授業で不可算名詞を習う。りんごは数えられるので

I want an apple.

は言えるが、水は数えられないので「I want a water.」とは言えず、冠詞をとって

I want water.

になると教わる。りんごは数えられて、水は数えられないと聞き一応分かった気にはなる学習者も少なくないだろう。

続いて「紙」「パン」「チーズ」や「砂糖」も不可算名詞と教わる。数えられないので「I want a paper / a bread / a cheese / a sugar」とは言えず、

a sheet of paper (1枚の紙)

a slice of bread (1切れのパン)

a piece of cheese (1かけのチーズ)

a spoon of sugar (スプーン1杯の砂糖)

という具合になるとされる。これらの名詞は「数えられない」ので sheet とか spoon という単位を示す言葉を補わなければならない。

ここで学習者の中には疑問が生じる者がいるだろう。何故なら、日本の日常生活の中で、私たちは当たり前のように「紙」「パン」「チーズ」や「砂糖」を数えているからである。「紙1枚取って」、「今朝はパンを1枚食べてきました」、「チーズは1個で十分だ」や「紅茶に砂糖は1つで良いですか」などといった台詞は日本語環境の中では別に奇異なものではない。

以下、何をもって不可算とするのかについて考えていきたい。

液体は数えられるのか？

水は不可算名詞だと聞くと、確かに水は液体だから数えられないのは当然だと多くの人は感じるかも知れない。しかし、本当に液体は数えられないの

だろうか？ 実は必ずしもそうではないのである。例えば、フランスのカフェでコーヒーを注文する時、

Un café, s'il vous plaît ! (コーヒー 1 つお願いします。)

と言うのである。対して、確かに水に関して

Une eau, s'il vous plaît ! (水 1 つお願いします。)

は決して言えない。部分冠詞をつけて

De l'eau, s'il vous plaît ! (水をお願いします。)

と言うのが普通である。では、なぜコーヒーは数えられて、水は数えられないのだろうか？ 黒い液体は数えられる、あるいは苦い液体は数えられる、というようなことはもちろんあり得ない。

なぜコーヒーが可算名詞なのかというと、「Un café, s'il vous plaît. (コーヒー 1 つお願いします。)」と注文した場合、フランスでも日本でも決まってカップに 1 杯のコーヒーが出てくるからだ。対して水はどうだろうか？ セルフサービスの店は別として、給仕のいる日本のレストランや喫茶店で「水を 1 つお願いします」と言えば、水はコップ 1 杯といった形で出てくる。しかし、フランスをはじめ欧米社会では事情は異なるのだ。そもそも、頼んだり注文したりしない限り、水が出てくることはない。そして水が出てくる場合、フランスのカフェでは

un verre d'eau (コップ 1 杯)

une carafe d'eau (水差し 1 つ)

une bouteille d'eau (ボトル 1 本)

un litre d'eau, deux litres d'eau, trois litres d'eau...

といったように、様々な可能性が考えられる。まず、コップに1杯の水だったら「Un verre d'eau」だ。大抵の場合は、コップと水道水の入った水差しの水が出てきて、客はその水差しから自分で注いで飲むことが多い。更に、瓶1本の水「Une bouteille d'eau」と言った場合、有料のミネラルウォーターになる。エヴィアン、ヴォルヴィックやペリエなどは日本でも良く知られていることと思うが、例えば、エヴィアンのボトルを1本頼むとしても、330ml、500ml、750mlや1Lなど様々なサイズがあって、それらを明言しない限りコミュニケーションは成立しない。「エヴィアン1つ下さい」では不十分なのだ。

つまり、コーヒーと水の違いは何かといえば、単位が決まっているかいないかである。「～を1つお願いします」と言った時、どういう形で出てくるかが、「話し手」と「聞き手」の間で互いに了解が取れているかどうかの問題だということだ。あるいはコンテキスト=文脈とも言える。単位に関してコンテキスト=文脈がある場合、物質が液体であっても「Un café / A coffee」というように不定冠詞がつく。対して、欧米社会では上記で様々な単位の可能性を示したように、水に関しては単位が決まっていない。更にコーヒーと違って、水は飲むためだけに使うわけではなく「バケツに水」ということだってあり得ることを言い添えておく。ただ最近では「Une minérale(ミネラル1つ)」で、1人用の330mlのボトル1本を指すようになったという。

以上の事情を考えれば、日本語では水がコーヒーと同じように可算名詞と捉えられていることが分かる。なぜなら日本の喫茶店やレストランで「水1つ」と言った場合、必然的に「コップ1杯の水」を意味するからである。

問題は「数えられる」/「数えられない」ではなく、数えるのに必要な「単位」を決めるコンテキストがあるかないかなのだ。つまり、文化の違いに関する問題だと言えよう。

チーズはなぜ数えられないのか？

では次に、フランス語ではなぜチーズは数えられないのか、について考え

てみたい。

日本語の環境では「チーズ1つとって」は問題なく言える。例えば、下の写真のような光景を前にしてどの単位がチーズ1つなのかは明らかである。銀色の包装紙に包まれた扇形の塊が1つである。この場合、包装紙で単位が分けられているわけだ。日本の場合、チーズは工場製品なので店頭で並べられる時はパッケージによって1個ずつ包まれており、1つという単位は明確である。率直に言って、このような光景しか見たことのない人にとっては、なぜチーズが不可算名詞なのかは理解し難いことであろう。



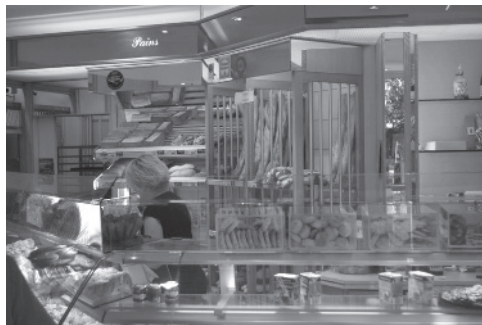
対して、フランスのチーズはどのようにして店頭で並んでいるであろうか。



この写真はパリの朝市に出店している屋台のチーズ屋さんのものである。基本的に街のチーズ屋さんに並ぶ商品は個人経営の農家で作られているものが大半であり、大きさがまちまちだ。丸いのやら楕円形やら、大きな塊をすでに細かく切り分けたものなど実に様々である。このような状況で「チーズ1つ」では会話が成り立たないのは自明だろう。決まったサイズ、つまり単位がないからである。大きいコンテチーズなどは「～グラム下さい」と言っただけで切り分けてもらうことになるし、他のものでは「その塊を1つ」とか「そのカマンベールを1箱」とか「これを半分」などといった言い方で注文することになる。この場合、チーズの種類によって、塊1つや箱1つの大きさや重さが異なることは言うまでもない。このような状態こそが「数えられない」ということなのだ。もちろん、スーパーに行けば大きさと規格の整った工場製品のチーズも置いてあるにはある。しかし、多くのフランス人にとってチーズ屋さんの光景とは上の写真のように大きさも重さもバラバラの様々なチーズが並んだ光景なのだ。「1つ」と言った時に単位が決まっていない様が上の写真から見て取れるだろう。文化の違いが反映しているのだ。

更に、チーズ以外の不可算名詞について説明しておこう。紙が数えられないのは、サイズがA4、A3、B5やB4など様々だからである。A4しか使わない環境であれば「紙1つ」が言える可能性は高い。

パンが数えられないのは下の写真でも明らかなように、フランスのパン屋さんには様々なパンがあり、バゲットとクロワッサンでは1つの大きさも



値段も異なる以上、不可算名詞として扱わざるを得ないからだ。ただし、そのパンの種類が限定されれば「バゲット1つ」や「クロワッサン2つ」のように可算名詞扱いとなる。なお、この写真の左上に「pains (パン)」という複数形の表記が見て取れる。これは「この店では様々な種類のパンを扱っています」という意味で複数となっているのだ。

砂糖に関しては、目の前に角砂糖が積まれていれば数えられることとなるのはすぐにでも分かるだろう。また、日本の場合、「砂糖1つ」はティースプーンに1杯を意味することが多いのでないだろうか？ そのような文化を持つ社会では砂糖は可算名詞と言って差し支えないだろう。

名詞の形態が個体であるとか液体であるとかが問題なのではなく、重要なのはコンテキスト＝文脈なのであり、その背後にある文化なのである。例えば、フランスにおいてもレストランでの以下のような会話は少しも不自然ではない。

給仕：Qu'est-ce que voulez ? (何になさいますか?)

客：Alors, qu'est-ce que vous avez comme plat ? (料理は何がありますか?)

給仕：Nous avons du boeuf, du porc, du lapin et du poisson. (ビーフ、ポーク、ウサギと魚料理があります。)

客：Bon. Je prends un lapin, s'il vous plaît. (では、ウサギを1つお願いします。)

多くの教師は、料理を注文するときに「Un lapin, s'il vous plaît.」(ウサギを1つお願いします。))は言えない、と教える。なぜなら「un lapin」は「ウサギ1羽」を意味するからである。だから上記の会話でもまず給仕は「du lapin」という風に部分冠詞「du」を付けている。だが、その後続く客の注文には「un lapin」といった具合に不定冠詞がついている。この場合、文脈から考えてこの「un lapin」が「ウサギ料理1皿」を指すことは明らかなので可算名詞となっているのだ。

これまでの議論をまとめると、問題なのは「数えられる」か「数えられない」かではなく、「数えるための単位」が決まっているかないかであった。そしてそれを決めるのには、社会的な習慣や風習、つまり文化といったことが大きく影響している。故に、フランスの文化や風習をよく知らない日本人にとっては、何が「数えられる」名詞で何が「数えられない」名詞なのかがよくわからないということになってしまうのだ。

果物が食べたい

ここでは加算／不可算ということを更によく理解するために「果物が食べたい」と言う場合、フランス語ではどうなるかを見ていきたい。

まず可算名詞である果物から見ていこう。

J'ai envie de manger une pomme. (りんごが食べたい)

J'ai envie de manger une orange. (みかんが食べたい)

J'ai envie de manger une pêche. (桃が食べたい)

J'ai envie de manger une poire. (西洋梨が食べたい)

J'ai envie de manger une banane. (バナナが食べたい)

対して、以下の果物は不可算名詞である。

J'ai envie de manger du melon. (メロンが食べたい)

J'ai envie de manger de la pastèque. (スイカが食べたい)

J'ai envie de manger du raisin. (ブドウが食べたい)

つまり、りんご、みかん、桃、西洋梨やバナナは数えられて、メロン、スイカやブドウは数えられないということになる。なお、果物と言ってもフランスではメロンとスイカは食後のデザートではなく前菜として出されるということをお話しておく。

フランス人の家庭では、果物は下記の写真のようにお盆にもって置いてお



くのが一般的である。食事の後、デザート時にはこのお盆がまわってくると、それぞれがその中から果物を1つ取り食べるのである。もちろん2個欲しい人は2個取ることになる。重要なのは、りんごなどの果物は、1人あたり1個を単位として食べる、ということだ。また、例えば、レストランなどでデザートとして「桃」を注文すると、皮を剥いていない桃1つが出てくる。つまり、果物の実1つが単位になっているわけだ。

対して、メロンやスイカは実1つが丸ごと出てくることはない。切り分けたものがお皿に載って出てくる。4分の1なのか8分の1なのかは、その時次第であり大きさも単位も特に決まっていない。ブドウは確かに実1つ1つを数えることができるし、1房2房と数えることも出来る。しかしフランス人が食後にデザートとして食べる時は房の中から食べたい分だけをちぎって自分の皿に取って食べるのである。その際、実何粒が1人分と決まっているわけではないので、ブドウは不可算名詞として扱われるのだ。

様々な単位

加算／不可算の区別は文脈によるところが大きい、ということを確認した。更に、買い物の場面を例にとり、加算／不可算の文化についての説明を続けてみたい。「牛肉をください」という発言を考えてみよう。これをフランス語に訳せば「Du bœuf, s'il vous plaît.」となり牛肉「bœuf」には部分冠詞がつく。ここではスーパーではなく、街のお肉屋さんで買うこととすると、当



(ここに並べられている牛肉はキログラムあたりの値段が付けられている)

然、上記の言葉だけではコミュニケーションは成立しない。肉はパックに詰められてはおらず計り売りであるので、何グラム欲しいのかを店員に伝えなければならない。その場合、

600 grammes de bœuf, s'il vous plaît. (牛肉 600g お願いします)

といった表現になる。

「数量情報 de 物質情報」という言い回しである。

別の例に以下のものがある。

1 kilogramme de farine (小麦粉 1kg)

1 mètre de fil (紐 1メートル)

7 mètres de tissu (生地 7メートル)

これらの名詞は、このようにいちいち単位を付けなければ買い物が出来ない。「小麦粉下さい」ではどのくらいの量だか分からないし、「小麦粉1つ下さい」と言った場合、何が1つなのかが分からないからである。事情は紐や生地の種類を数える場合も同様だ。

フランスは基本的に計り売り文化であり、りんご1個や人参1本ではな



(フランスのスーパーの野菜売り場。例えば、左の人參を欲しいだけ袋に入れて右の秤に載せるとバーコードが出てくるので、それをレジで示して会計をする。なお、左の人參は、上段の人參と下段の人參で値段が違う。)

く計量しグラムやメートルという単位で売り買いする文化なのだ。

対して、日本では袋詰めされていたり、パックになっていたりとという状態で商品が棚に並んでいる光景が普通である。もちろん、日本でもパック詰めされた肉や魚に 100 グラムあたりの値段が書いてあり、パックごとに値段が違うことはある。しかし、フランスのように商品を自分が欲しいだけ取って自分で計って買うということは稀であることは事実だろう。

またフランスの市場では、以下のような表現を見かけることがある。

- Une tête d'ail (ニンニク 1 株)
- Une botte de carottes (人參 1 束)
- Une barquette de fraises (苺 1 パック)
- Une pièce de maquereau (鯖 1 尾)

これらの表現は「株」「束」「パック」などを単位として数えているというこ



(人参、黒大根、二十日大根とネギは紐で縛られており、1束あたりの値段が札に記されている)

とだ。フランスではこのように、グラムやメートルなどのような単位を使わない場合、以上のような単位を明記して販売することもある。また、牡蠣や卵などは1ダースを単位として売り買いするということも言い添えておく。

つまり、フランスでは「数量情報 de 物質情報」という言い回しで、数量情報の単位を明示し、その後に「de」とモノを続けてコミュニケーションを行なっているとまとめることができる。

対して、日本語の特徴は「個」「本」「枚」のような単位があることだと言える。もちろん「人参1本」の重さはまちまちであるし、「紙1枚」のサイズも決まっているわけではない。しかし、そのような単位を使って日々の生活を送っているわけだ。このような単位に対する感覚が当たり前になっている日本語話者にとって、「水1つ」が数えられないと考えるフランス語の思考は確かに馴染みのないことなのかも知れない。ただ、日本語を学ぶフランス人にとっては逆に「1個、2個、3個…」、「1本、2本、3本…」と「1枚、2枚、3枚…」といった単位の使い分けを理解することは簡単ではないことを想像してみよう。フランス語では通常「un/une, deux, trois…」となり単位を付けずに数えることが普通だからである。

数えていないけれど可算な名詞

最後に数えているわけではないが、可算名詞として扱われる名詞を紹介しておこう。「ポテトチップス」、「フライドポテト」や豆類である。

「～が食べたい」という例文を考えた場合、以下のようになる。

J'ai envie de manger des chips. (ポテトチップスが食べたい)

J'ai envie de manger des frites. (フライドポテトが食べたい)

J'ai envie de manger des épinards. (ほうれん草が食べたい)

J'ai envie de manger des lentilles. (レンズ豆が食べたい)

J'ai envie de manger des pois. (グリンピースが食べたい)

レンズ豆と同じくらいの大きさの米の場合は「du riz」となって部分冠詞がつくし、米と同じようにレンズ豆を数えているわけではない。もちろん他の名詞も同様だ。また、通常の日常生活の中の用法で「un chip」、「un épinard」、「une lentille」や「un poi」のように単数が一般的に使われるわけではない。慣習として可算名詞と決まっているということだろう。

結 論

フランス語の世界において、可算／不可算の違いは対象の物体が液体であるか個体であるかで決まるわけでもないし、更に言えば、数えられるか数えられないかで決まっているわけでもないことが確認できた。例えば、水は不可算名詞だが、液体でもコーヒーは数えられる名詞として扱われることがある。また、りんごは可算名詞だが、ブドウは不可算名詞なのだ。

様々な名詞を検討することによって、可算／不可算の違いは、数えるための単位が決まっているかいないかであることが確認できた。そしてそのような単位が社会の構成員の間で前提として受けいれられているかいないかは文化的背景によって決まっていることも確認できた。というわけで、日本人学習者がフランス語の不可算名詞について学ぶには、表面的な文法的規則をお

ほえるだけではなく、その背後にある文化について学ぶ必要があることを強調しておきたい。